

加茂農林高生 柿渋染め講座



①柿渋の魅力伝える林さん(右から2人目)＝美濃加茂市の加茂農林高で
②生徒らが仕上げる柿渋筆入れ

地元特産の柿の活用を広めようと、美濃加茂市の加茂農林高校食品科学科の生徒たちが十三日、柿渋染めの市民向け講習会を同校で初めて開いた。子どもから大人まで二十四人が参加し、柿渋を使って布に模様を付ける体験をした。
(平井一敏)

生徒らは市特産の高級干し柿「堂上蜂屋柿」の振興策を研究する中で、担い手の高齢化などにより管理されなくなった柿の新たな活用方法として柿渋に着目。柿渋の普及を目指す取り組みの一環として、同科三年生の林克之さんが講習会を企画した。

染織作家らから染め方を習った林さんら生徒三人が柿渋で染めた綿の生地と、鉄を入れて黒く変色させた柿渋液を用意して指導。参加者は液を筆に付けて草花や文字、図形など思い思いの模様を描き、柿渋

市民向け 伝統の普及目指す



染めの糸を使ったミサンガ作りも楽しんだ。
生地は今後、生徒らが天日で干し、筆入れに縫製して各参加者に渡す。参加した同市太田町の桜山(すえ)さんは「貴重な経験ができ、日本の伝統的な柿渋を残していく大切さを感じた」。林さんも「皆さんに喜んでもらえ、柿渋のPRもできて良かった」と笑顔を見せた。

生徒らは二十七日に市総合福祉会館で開かれる健康・福祉すこやかフェスティバルで、開発した「柿渋せっけん」も紹介する。消臭効果のある柿渋を入れることで廃油せっけんの臭気を抑えた商品で、同市新池町の障害者支援施設「ひまわりの家」の保護者の会が生徒の指導を受けて作った。

柿渋染め市民講座・本校で開催

H30(2018) 10. 16 (火) 中日新聞 掲載記事

加茂農林高が「ひまわりの家」に伝授



柿渋を使った廃油せっけんを作る保護者ら＝美濃加茂市新池町のひまわりの家で

柿渋せっけん 作ってみては

美濃加茂市の加茂農林高校食品科学科の生徒たちが二十五日、同市新池町の障害者支援施設「ひまわりの家」で、利用者の保護者に柿渋を使った廃油せっけん作りを指導した。十月二十七日に市総合福祉会館で開かれる「健康・福祉すこやかフェスティバル」で試験販売される予定。
(平井一敏)

生徒らは市特産の高級干し柿「柿」を取り組んでいる。「堂上蜂屋柿」の振興策を研究。柿渋せっけんは、同施設で保つた中で、聞きかたされる柿の保護者の会が廃油せっけんを製した活用方法として柿渋に着目。販売していることを知った目。本年度から同科の二、三年生の長尾佑耶さん(へい)が先生五人が柿渋を利用した商品開発した。生徒らが試作したとこ

特産柿活用 製品化へ意欲

黒く染まった液体を専用の容器に注ぎ入れ、三十分を準備。そのまま乾燥させて固め、一月ほどで完成する予定だ。廃油せっけんは同施設の製品の保護者らは「自分たちには思いつかないアイデアを教えてもらえありがたい。柿渋せっけんでも人気が高まっている」と期待を寄せていた。

生徒たちは、同施設の利用者が活用しているかばんに柿渋を活用することなども考えている。長尾さんは「さまざまな商品を開発し出して、柿渋を国、世界に発信していきたい」と話していた。

ひまわりの家で作りました

柿渋廃油石けん作り

H30(2018) 7. 25 (水) 中日新聞 掲載記事